

## 秀賞

### 伊勢堂岱遺跡の魅力を伝えたい

秋田県北秋田市立鷹巣中学校

2年 佐藤 暖胡

みなさんは「伊勢堂岱遺跡」をご存じでしょうか。2021年夏、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一つとして世界文化遺産に登録された、私の街が世界に誇る遺跡である。私はこの遺跡を訪問した人に、その素晴らしさを紹介する「伊勢堂岱遺跡ジュニアボランティアガイド」をしている。今年でもう4年目となる。

私がガイドをする理由は二つある。一つ目は縄文時代や土偶が好きで、もっとたくさんの人に知ってほしいと思うからである。もう一つは、伊勢堂岱遺跡を中心として、観光業やそれに関係する産業が活性化して、北秋田市がもっと明るい街になってほしいからだ。

今年のガイドは、今までのガイドの中でも特に心に残るものになった。毎年のことだがガイド4年目とはいえ、とても緊張する。しかし、1年目や2年目の小学生の頃とはまた違う緊張感だ。小学生の頃は、ガイドブックに書かれている内容を間違えないように、飛ばさないようにと、必死に暗記していた。そして、私は正確に内容を伝えられているだろうか、お客さんは興味をもって聞いてくれるだろうかという大きな不安から緊張していたのだ。でも今は、このときにあれを話そうかな、あの内容も伝えたいな、この順番で説明したほうが分かりやすいかな、などという期待と興奮から緊張している私がいる。相手のことを考えて、どのようにガイドを進めたら良いかを考えるようになったのだ。

今年最初にガイドをしたのは、遺跡の発見のきっかけになった工事に関わっていた方だ。大好きな遺跡を見つけた人たちの一人だと知り、私もガイドに俄然気合が入った。私のもっている知識を正確に、できるだけ分かりやすく伝えようと意気込んだ。しかし、予想外のことが起こった。熊のガードのためについてきた大人の係の人が、自分の体験を織り交ぜながら、想像しやすく分かりやすく説明を始めたのだ。「私がガイドなのに」と悔しさが込み上げてきた。でも、ふとお客さんの顔を見てみると、今までよりずっと楽しそうな表情を浮かべていた。私は二人の背中を追いかけながら、あることに気付いた。私は縄文について興味がある人が来るのを待っていたのだ。でも、大切なのは、興味をもってもらえるようなガイドを自分がすることだったのだ。このとき、私の中のやってやるぞという今までにないエネルギーが湧いてきた。そして、次からは相手の反応を見ながらその人に合ったガイドをしていこうと心に決めた。

その決意を実行に移せるかの試練が早くも数分後にやってきた。その日の二

人目、カメラと派手なぬいぐるみを携えてやってきたお客さん。ガイドをしながら会話をしていくうちに、その方は、すでに他の世界遺産の遺跡にも行ってきたということを知った。そして他の遺跡と比べながら私のガイドを聞いてくれたり、他の遺跡で撮ってきた写真を見せてくれたりした。そこで、私はお客さんの写真にはない出土品の土器を案内することにした。すると、「こういうものは、他の遺跡にはなかったな。」と驚いたようなうれしいような声を上げた。そして、土偶や岩偶が並んだガラスケースの前にきたとき、私はいつもよりも少し長めに時間をとった。お客さんは自慢のカメラで写真を何枚も撮っていた。前回の経験を生かして、相手が何を欲しているのかを考えてガイドをすることができた。

今年のガイドは、自分でいろいろなことを考えて判断しながら取り組んだ分、達成感も大きかった。また、お客さんのことを考えることによって、会話も楽しむことができた。今は、私が説明したことをお客さんが面白いと言ってくれること、そして笑顔で楽しかったと言って帰っていく姿を見ることがガイドをするうえで一番うれしいことだと思っている。

そして、もう一つ気付いたことがある。それは、ガイドをすることによって自分自身の考えを深められるということだ。伊勢堂岱遺跡に来られるお客さんの中には、縄文が好きで、縄文の遺跡を巡るためにわざわざ遠くから足を運ぶ方もいた。ガイドをする前から知識があり、いろいろな考えをもって話を聞いてくれた。実は、私が教えているのではなく、私は知らないことを教えてもらっていたのだ。ガイドをすることによって、私の見方・考え方が広がっていたのだ。

私は、お客さんとの会話を楽しみながら、今よりも深みのあるガイドをしていきたい。そして、多くの人に伊勢堂岱遺跡のすてきな魅力を伝えていきたい。私の伝えたいという気持ちは、世界から見ると小さなエネルギーかもしれない。でも、そのエネルギーが広まり、未来の北秋田市を動かす大きなエネルギーへと変わっていく。私は、そんな明るい未来を夢に描きながら、これからも「伊勢堂岱遺跡ジュニアボランティアガイド」を続けていく。